

しむ。會、浩罕の使者三名の到る有りて新に通商の事を議せんとす。長齡其の二使を還へし一使を留めて、湖查を献じ、且つ我兵の虜と爲りし者を回へすを命せり十月に至つて其の使者歸り報すらく、捕虜は釋還すべし、湖查を出すは經典になき所なりと、辭頗る驕る。長齡熟思ふ、今喀什噶爾、伊犁若くは烏什吐魯番の三路併び進み、一浩罕を掃蕩せんとするは難きに非らず。然れども浩罕、布魯特の間に鐵列克嶺の險あり、師を勞するに値せずと。宣宗之に従ひ、請を許し、和約調ひて通商舊に復しぬ。

清廷の兵備

清又長齡、玉麟の建議に依り、喀什噶爾の軍鎮を葉爾羌に移し、戍兵を増して各城の守備を堅うす。即ち喀什噶爾に兵三千、英吉沙爾に千五百、葉爾羌に六千、巴爾楚克瑪喇巴什に三千、和闐に五百、阿克蘇、吐魯番及烏什に各一千、大略以上の兵を備へ特に壁昌を擧げて參贊大臣に任じ、以て葉爾羌を治せしむ。其後喀什噶爾地方の形勢一新し、吏治稍整ひ、浩罕亦利を重じ、湖查の監守を嚴にして、道光二十七年(千八百一十七年)に至るまで、無事に経過したり。

噶塔朱里亞の亂

是より先き浩罕王、布魯特と戦ひて敗死するや、以來其の威漸く衰へ、政黨の爭奪